

東方仮面録～デンジャ ラスな神～

コールドドライブ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

様々な人外が暮らす幻想郷。そこにゲームマスターの力と頭脳を持つた少年が転生
する。彼はこの世界で何を想い、何を感じるのか。

目

次

—序曲 《プロローグ》

デンジヤラスな神、 転生するつてよ。

神、 戦うつてよ。

5 1

一序曲 ≪プロローグ≫

デンジヤラスな神、転生するつてよ。

「貴方の転生先は何処にする？」

「訳が分からぬよ」

えー只今俺は非常に困っています。今俺の前にとても神々しい女性が立っています。
そしてその人が俺を転生させるとか言っています。この状況どうすりやいいの？まず
転生つてなに？

「転生と言うのは…まあ死んだ人間の中から一部の人間が異世界へ行くことよ。」

「え、何で心の中で言つた筈の質問が分かつたんですか!?」

「そりやあ簡単。私が神だからよ。神に不可能は無いわよ。北条幻魔君」

わあお。なら転生だの何だのの意味が分かつた。

神「物分かりが早くて助かるわ。で転生先の世界は何処にする？」

北条「何処でも良いですよ。マグマの上とか氷河の上とかじやなかつたら。」

神「さすがにそんな所にするわけないでしよう。んじやあ転生先は此方が貴方に適當

そうな所を選んで置くわね。」

2 デンジャラスな神、転生するってよ。

まあそんなことされたら流石に恨むわ。

北条「有難うございます。」

神「次に特典についてよ。特典とは転生先に何か持っていくものの事で、空想の物でもいいわよ。」

北条「そうですか：ならちょっとと考えさせてください。」

神「分かったわ」

「数十分後」

神「決まつたかしら?」

北条「はい。ゲーマードライバーとプロトマイティアクションXガシャットオリジン、デンジャラスゾンビガシャットを下さい。後檀クロト神位の頭脳を下さい」

神「それならデンジャラスゾンビガシャットの不死能力は失われるけどいいかしら?」

北条「ええ。」

神「なら転生させるわよ?」

北条「その前に何故俺が死んだのか教えてくれません?」

神「ああ、それはね::近くの火事の家に飛び込んで逃げ遅れを二人救つたのだけどそのまま自分が逃げれずに炎に包まれてしまつて死んだのよ。」

北条「ああ、そうなんですか::まあお先真つ暗の俺一人で二人の人を救えたし結果オーライかな?」

神「貴方は生前全く恵まれなかつた… 私達が世界に直接介入できないけど貴方の第二生が幸せな物になることを願つてゐるわ。それじゃ、行つてらつしゃい」

神はそう言うと魔法陣なような物が俺の前に出来上がる。ここに入れれば転生出来るのだろう。

北条「色々有り難うございます。こんな俺の為に… では。」

神に感謝の気持ちを述べ、魔法陣の中に入る。そしていく直前、神が思い出したようにこう言つた。

神「あ、マイティアクションXガシャットオリジンは精神を活性化させテンションを上げる副作用が有るけど気にしないでね。」

北条「え、マジっすか？ あ、転生先のアイテムにプロトマイティアクションXガシャット入れといて下さい！ 行つてきまーす！」

最後に重大な事を聞かされたがまあ気にせずゲーム病対策にオリジンじやないプロトマイティアクションXを頼んで置いた。そして俺は意識を失う。

神「… どつちにしろプロトマイティアクションXなら精神活性化の副作用は有るけど… 良いのかしら。ま、頼まれた通りにしますかね。」

神、戦うつてよ。

北条「ここは…森か？」

俺が次に目覚めると森の中にいた。近くには人が居そうな気配がない。

北条「と言うかこの世界でこれつて使うのか？」

そう言つて俺は近くに落ちていたゲームードライバー、プロトマイティアクションXガシャットを手に取つた。俺は戦闘用に強すぎるがあつて損はないかなと思いこれらを特典として選んだのだがこんなだだつ広い森で使うとは思わない。いや、もしかしたらこの森を抜け出したら使う事になるかもしれない。まあそなら頑張るか。

そう思つていると、上からシャカリキスピーツガシャットとギリギリチャンバラガシャットとハイパーMテキガシャットが落ちてきた。

北条「何でこれが…確かにこれでゲンムの使用ガシャットは全て揃つたけど…何はともあれこの森を抜け出す事が最優先か。」

そう言つて俺は真っ直ぐ歩き続ける事にした。

「数時間後」

北条「やつと出れた。」

歩き続けて数時間、やつと森を抜け出せた。水分補給はそこら辺の川ですれば良いがとにかくこの森が広い。もうヘトヘトである。と、そんな事を考えているとある重要な事に気がついた。

北条「あれ？俺つて何処で暮らすんだ？」

そう。すむ家がないのである。これは困った。別に木の上で寝ても構わないのだが、森の中には沢山の獣の匂いがした。多分そんな所で寝ていれば獣に食われて GAME

OVERになるかもしない。いや絶対なる。なので廃墟を探す。
たつて文句はない筈だ。そうと決まれば早速——

ドガーン！チュドーン！

!?

北条「何の音だ？あつちの方角からだよな。」
行つてみるか。」

そう言つて俺はシャカリキスピーツガシヤツトで自転車を召喚し、音の鳴つた方へ急いだ。乗つてゐる途中最初からこれ使つていれば良かつたと思つたのは余談。

『北条視点』 END

『視点 START』

何よあの化け物… 私の剣激が効かないばかりか魔理沙のマスタースパークと靈夢の夢想封印の同時攻撃でビクともしないなんて…

不味い！攻撃が来る！

静かにしてくれよ

一
え?
」

声が聞こえた方を向くと鉄の車輪が前と後ろに着いた乗り物に乗った十五才位の男の人がいた。

「え？ 逃げてない人がまだいたの？」

「おい、お前！ ここは危険だ。とつとと逃げろ！」

靈夢と魔理沙が言つても聞く耳を持たずに乗り物から降りてゆっくり歩いてくる。化け物もそんな彼を攻撃対象にしてしまったようだ。

「まさかこれを使う事になるとはなあ。ま、パツパと片付けますか。」

『? 視点 END』

『北条視点 START』

北条「まさかこれを使う事になるとはなあ。ま、パツパと片付けますか。」

そう言つて俺は手に持つたゲームードライバーを腰に当て、プロトマイティアクションXガシヤツトオリジンを取り出す。

「Garuuuuuuuuuuuuu！」

北条「だから煩いなあ！ グレード0」

マイティアクションX！

化け物の叫び声にイライラしながらプロトマイティアクションXガシヤツトオリジンのボタンを押す。近くにゲームエリアが展開され、チョコブロックが設置される。「な、何だこれ？」

「Gruuuuuuuuuuu？」

近くの人達と獣が驚いているが気にせず変身する。と言うか彼奴に驚くとかいう感情があつたのか。

北条「変身」

そう言つて俺はマイティアクションXガシャツトオリジンをゲーマードライバーに差す。

ガシャツト！

その後素早くベルトのレバーを開く。

ガツチャーン！ レベルアップ！

マイティジヤンプ！

マイティキック！

マイティーアクションX！

変身音声がなり俺の周りを五人のモノクロのゲームキャラのパネルの様な物が周る。

俺はそのなかの刺々頭のキャラのパネルをタッチし、前に現れた俺の背丈より高いパネルを通過する。俺の体をパネルが通り過ぎると俺は黒を基調とし、顔は選択したキャラとそつくりで、手にはノコギリと銃が合体したようなゲーム器らしき物を装備した姿——『仮面ライダーゲンム レベル0』に変身した。

「え··· 姿が··· 変わった？」

ゲンム「私は仮面ライダーゲンム、アクションゲーマーレベル0。貴様をコンテ
ニューしてでもクリアする！」
そう言って俺は敵に突っ込んでいった。